日本英学史学会本部例会第 506 回　　2016.12.3

越前府中と蘭方眼科医齋藤策順家―齋藤修一郎を育んだ土地と時代―

川瀬　健一

１：テーマ設定：

5 月 7 日（第 501 回例会）にて、「齋藤修一郎のアメリカ観」の題にて報告を行った。その際、齋藤の最後の著書『日米外交論』（1910 年相模書店刊：共著者大塚善太郎の名で出版）で齋藤が示したかったことは、『今後の日本外交の焦点は対米策にあり、として米国の外交政策の今後の展開の性格を其の歴史から予測し、それは極東においては超然主義から帝国主義へと次第に移行し、アジアに対する野心を露骨に示すものとなろう。その際に米国の外交の障害になるのは日本である。米国は日本に対して特に満州に日本が確保している権益の放棄を迫ってくるだろう。そしてこれを「清国の領土保全」と「機会均等主義」の理想の下に提案してくるため、英仏独の列国もこれに賛同せざるを得ない。日本とロシアのみ米国の力の脅威にさらされる。そして米国の提案をこの２国、特に日本が拒否することは米国民の対日感情を悪化させ、それがさらに米国の対日本政策を後押しする。日本の国力では米国に抗することはできない。その「機会均等主義」に従い、産業を盛んにして貿易を振興する策をとって、米国と対立することは避けなければいけない。』と報告した。そして、『齋藤が『最近米国観』＝『日米外交論』で論じようとした、彼独自のアメリカ観に基づいた日米外交戦略は、日本が日米戦争に負けたあと、戦後において取った戦略そのものである。この意味で齋藤の戦略は、時代を 30 年以上先駆けた先駆的なもので、その根拠となったアメリカ観・アメリカ外交観は、今日においてもまだ有効だと思う。』とし、ほぼ同じようなアメリカ観・アメリカ外交観を持っていたとみられる人々（伊藤博文・原敬ら）がなぜこのような卓越した視点に立てたのかを明らかにするための一つの試みとして、齋藤の思想形成の過程を探ることが、今後の研究課題であるとした。

今回の報告はその第一回、彼の生い立ちを探り、齋藤を育んだ環境を見ることで、彼の思想形成の背景を探ることとする。

●**齋藤修一郎の誕生：**安政２年７月 10 日（1855 年８月 22 日）、越前府中(福井県武生市・現在越前市)本多家蘭方眼科医齋藤策順の長男として府中に生まれる。母は隣国越前鯖江藩士藤田謙十郎の妹フミ

（修一郎の生年については戸籍謄本による。母の名前は、松本源太郎日記および長谷寺過去帳などによる）。

２：府中本多家医師齋藤策順家（資料１齋藤家墓所参照）

●代々府中本多家眼科医師

１）**初世策順・**「宗源信士」延宝元年（1673 年）４月 15 日没。→後「咸譽状意居士」と改名。

妻・「妙貞信女」元禄２年（1689 年）５月５日没。→後「遣譽栄仰大姉」と改名

２）**二世策順・「行譽光窓常観居士」**寛延２年（1749 年）6 月 1 日没。

妻・「本譽明窓智誓大姉」寛保元年（1741 年）６月 15 日没。

※福井藩主松平氏の妾腹の息子伊織（生後二カ月）が眼病を患った折に、二世策順が二度に渡って治療したため、感状とともに福井城本丸において福井藩主お目見えの栄誉を得たことが記録に残されている。享保７年（1722）10 月 15 日のことである　（「家老状留」七『武生市史資料篇府中藩政并本

保陣屋諸記録』１９６８年刊所収による)。

※二世が初めて本多家の医師となったものか？（「家老状留」から福井松平氏息の治療にあたる前にすでに本多家医師となっていたものと思われる。）

3）**三世策順**・「端譽慧窓常本居士」安永３年（1774 年）４月 17 日没。晴好。行年 47 才。

妻・「繁譽福窓栄本大姉」明和９年（1772 年）７月３日没。由伊。儒者栗塚氏娘。行年 41 才。

4）**四世策順**・「博譽練窓亮本居士」寛政８年（1796 年）２月２日没。公彬。

妻・「香譽梅窓貞本大姉」寛政８年（1796 年）２月 14 日没。

※四世策順夫妻は、策順の死からわずか 12 日の間をおいて妻が死去し、さらに 5 か月後には二人の娘と思しき人物も死去して四世の家族全員、相次いで死去していることがわかる。おそらく流行り病であろうか（修一郎六女清水桂子家所蔵「齋藤家過去帳」などから)。

5）**五世策順**・「窓譽直本遊仙居士」天保５年（1834 年）５月 17 日没。

妻・「静譽月窓妙本大姉」天保７年（1836 年）12 月 17 日没。

※五世は四世の弟。兄の死により大坂で開業していたが越前府中に呼び戻されて齋藤家の家督を継ぐ。大坂堂島の米相場に手をだし、動産も不動産もすべて失い、60 貫目の借金を作る。銀一貫は金貨 16 両。銀 60 貫の借金は 960 両。１両は今の 12 万円相当だから、総額で１億 1520 万円ほど。このため若くして隠居し、家督を息子修伍に譲った（齋藤修一郎著『懐旧談』による)。

※文政二年（1819 年）閏四月、子息を武士身分（十石二人扶持・藩主近習役）として分家（別家齋藤宗兵衛家）(『本多家家臣録』による)。跡継ぎの妻に主席家老松本氏の娘を貰う（修一郎『懐旧談』・『齋藤家過去帳』による)。

6）**六世策順**・「峻譽徳窓哲道居士」天保８年（1837 年）７月 14 日没。利兼幼名修伍。行年 36 才。

妻・「誓譽願窓松山大姉」慶応元年（1865 年）５月 14 日没。八重子。家老松本氏娘。

※父の借財のおよそ半額を返済（修一郎『懐旧談』による)。府中本多家医師三世石渡宗伯（1834 没）―京都で小林芳洲と福浦某に医学を学び、物産の学を本草学者小野蘭山に学んだ医師―の弟子（府中医師の五世石渡宗伯―修一郎の母フミの従兄弟―の息子である土肥慶蔵―東京帝国大学医学部皮膚科教授―著『顎軒遊戯』1927 年改造社刊による)。

7）**七世策順**・「諦譽寒窓道本居士」安政５年（1858 年）９月 27 日没。良。行年 33 才。

妻・「観譽梅月貞窓大姉」大正２年（1912 年）３月１日没。フミ。鯖江藩藤田氏娘。行年 73 才。

※七世策順が齋藤家の中で初めての蘭方眼科医師。京都の蘭方医師・医学者の日野鼎哉に蘭方眼科学と外科を学ぶ。：越前へ種痘を広めた立役者の一人。七世策順が日野鼎哉に入門した時は不明だが、同門の渡辺静庵が日野に入門したのは天保 12（1841）年。この同じ時期に策順と同じく府中医師生駒耕雲が日野塾にいたとすると、齋藤は 19 才、生駒は 33 才。

★策順が蘭方眼科医学を学んだ理由は？　**（資料２：「日本における眼科医学の歴史）参照**

七世策順が日野に入門した時代は、蘭書眼科書が翻訳刊行されて西洋の眼科学への関心が高まり、さらに眼科と外科が得意なシーボルトが来朝し、彼に実地に眼科治療を教わった眼科医が、日本眼科界の中心となった時代であった。

★種痘普及は西洋医学の卓越さを人々に知らしめた（資料３「日野鼎哉と越前への種痘の普及」参照)。

天然痘撲滅のために牛痘の苗の輸入を幕府に働きかけたのは：

・越前福井藩主松平春嶽　と　肥前佐賀藩主鍋島閑叟

※牛痘苗の伝来経路：　オランダ領バタビア⇒長崎⇒京都⇒福井→北陸・東北・江戸へ
⇒大阪→近畿へ
⇒佐賀→九州・中国四国・江戸へ

※種痘普及以後府中では蘭方医学学習が盛んに。

・嘉永六年九月（1853 年 10 月）、五世石渡宗伯 と皆川文仲が京都の蘭方医師新宮涼庭に入門。

・安政二年二月（1855 年３月）、齋藤策順の弟の９世大雲正意が京都の広瀬元恭に入門し、そこで手に入れたオランダ語の内科医書も残されている。

・安政三年六月（1856 年７月）、宗伯の末弟の石渡寛輔が大坂の緒方洪庵に入門。（７世齋藤策順死後は齋藤家に養子にはいり８世齋藤策順を継ぐ）。

●1865（慶応元）年５月 14 日。修一郎を父母に代わり養育してきた祖母八重子が死去。修一郎数えで 13 歳。この時から父策順の弟で同じく本多家医師である大雲正意・金作（嵐渓）に養育され、学問を授けられる。この後一念発起して勉学に励んだと『懐旧談』は語る。この頃「藩校」立教館に入学か。

●母のフミの母ヒデ（修一郎母方祖母）の弟が越前府中最初の蘭方医師といわれる八世滝玄設。

●滝玄設（1798－1834）：文化十四（1817）年三月京都に遊学。医学を小森玄龍 などに学び、多くの蘭書を書写。文政六（1819）年帰郷。文政九（1826）年九月家督を継ぐも、天保五（1834）五月 36 才で死去（「武生医師会誌」1967 年ｐ91 と、神門酔生著「土生人脈譜人物明細解誌」1974 年ｐ34 による）。

> **※齋藤修一郎を養育した人・その周辺は当時隆盛していた蘭方医学者であった。**
> **⇒修一郎の異国観への影響は？**

３：幕末・維新期における福井藩松平家・府中本多家の位置

●福井藩の動き：有力諸藩も含んだ公武合体政体を模索（薩摩藩などと連携）し政局を主導。

福井藩と佐賀藩とは、西洋軍事科学と軍事術の導入の双璧

●福井藩による西洋文明導入の歩み：

時はすでにアヘン戦争による清国の敗退と、アメリカペリー艦隊来航による開国で、日本が西洋列強の侵略に怯え、これに備え始めた時期で、福井藩ではすでに早くも西洋軍学を取り入れた。

★福井藩による西洋式に軍隊を再編成する動き

・弘化四年（1847 年）春、藩砲術師を江戸の高島流砲術家に入門させ洋式砲術と銃陣調練を研究させる。

・嘉永元年（1848 年）八月、江戸から洋式大砲鋳物師安五郎を招き、西洋砲を多数製造させ、三国の鋳物師にその技術を学ばせる。嘉永二年三月―六種十一門、夏四門、六年六月九門製造し、沿岸に配備。

・嘉永六年（1853 年）九月、江戸の鉄砲師松屋斧太郎にゲベール銃製作を命じる。⇒技術資金不足で量産に失敗。

・安政四年（1857 年）正月、佐々木権六・三岡八郎を頭取に任じ、本格的兵器生産を命じる。⇒明治維新直後までに 7000 挺の洋式銃を製造。

・嘉永三年・嘉永五年・安政元年・安政四年と、藩の軍政改革を行い、弓組や長柄槍組を西洋式

銃隊に編成替えを行い、福井藩の軍政を西洋式に編成していった。

・嘉永六年（1853 年）九月の幕府による大船建造禁止の解除を受け、洋式船の建造に着手。

・安政六年（1857 年）に一番船が竣工し、一番丸と名付けられ、藩用船として活躍。

★福井藩による西洋学術の習得。

・安政二年（1855 年）六月、藩校明道館を開校。

・安政三年（1856 年）、橋本左内を登用して学制改革を実施。

・安政四年四月十二日（1857 年 5 月 5 日）に洋書習学所が設置され、西洋諸国の長所を学んで我が国の科学に足らない部分を補足し我が国を万国に優れたものにすることは、尊王攘夷において肝要であると定められ、学ぶべきところとして、兵器・軍器・医術があげられている。

★越前府中本多家での動き。

・安政元年（1854 年）十一月、福井藩から本多家へ軍制改革のため重役の福井への出張が命じられ、今後軍制は西洋式に変更と命じられる。軍制改革の頭取には 23 才の松本右馬丞（晩翠）があたり、安政五年までこの軍制改革は続いた 。

※松本晩翠は後に本多家主席家老となった人で齋藤修一郎の父七世齋藤策順の従兄で著者の母方の祖父松本均の父。また当時の本多家家老の中で高木家・本多家・薬師寺家・平野家・滝家・松本家はみな齋藤修一郎の近しい縁戚（縁戚ではない家老家：井上家・佐久間家）。

★福井・府中での海外留学の動き

・福井藩の瓜生寅（1842－1912）：万延元（1860）年長崎に赴く。文久元（1861）年長崎でウィルリヤス・フルベッキ両氏に英語を学ぶ。文久二（1862）年九月長崎の幕府英学校教授。慶応三（1867）年福井で英学塾を開く。のち藩校英学教授。明治三（1870）年大学南校助教。明治四（1871）年南校事務掛 。

・福井藩の日下部太郎（1845－1870）本名八木八十八：慶応元年（1865）年瓜生に連れられ長崎に留学し、フルベッキの英学塾に学ぶ。慶応三（1867）年二月。福井藩の命を受け米国に留学。ラトガース大学に学ぶ。

・府中本多家の山本龍次郎（1839－1918）：分家で福井藩士の山本匡輔の養子となる。安政二（1855）年福井藩藩校明道館入学。安政五（1858）年五月明道館幹事（橋本佐内ら）御用手伝役。文久二（1862）年江戸昌平坂学問所入学。勝海舟らと時勢を論じる。慶応元（1865）年蝦夷巡視。慶応二（1866）年長崎滞留。坂本竜馬と会い海援隊員となる。慶応三（1867）年七月。イギリス船でイギリス密航を図るが失敗 。

・府中本多家の渡辺孝一郎（1848－1901）

医師渡辺静庵の長男。安政三（1856）年府中立教館入学。医学校済世館でオランダ語習得。元治元（1864）年下総佐倉の蘭医佐藤泰然塾に移り講師。慶応元（1865）年江戸の箕作麟祥塾・福沢諭吉塾で英語を学ぶ。慶応二（1866）年幕府医学校英語教授。慶応四（1868）年会津藩・米沢藩英学校を開設 。

（三上一夫著『幕末維新と松平春嶽』2004 年吉川弘文館など。松本秀彦著「父の思い出そのほか」1971 年私家版 p 16－18。山下英一著『グリフィスと日本』1995 年近代文芸社刊、『グリフィスと福井（増補改訂版）』2013 年エクシート刊。越前市編『越前市史資料編 24 明治維新と関義臣』2012 年刊。　文殊谷康之著『渡邉洪基伝―明治国家のプランナー』2006 年ルネサンスブックス刊。などによる）

越前府中における蘭方医学の発展や福井や越前府中での西洋の軍事学術導入を中心に越前での西洋への関心の広まりを追っていくと、この過程は 1855 年 8 月 22 日（安政二年七月十日）生まれで明治三（1870）年三月に沼津の旧幕府静岡藩の沼津兵学校付属小学校に入学し英学を学び始めた齋藤修一郎の幼年青年期にぴったりと重なる（資料４「齋藤修一郎年譜と越前における洋学普及」参照）し、その主要な人物の多くが彼に密接な関係を持っていた人である。西洋による侵略の危機感の広がりと種痘法の広がりによって、少なくとも越前においては、知識人ならだれでも、西洋が日本よりも強大で優れた学術をもった国であることは十分に知られていた。

⇒修一郎の異国観への影響は？

４：まとめ：

齋藤修一郎はその生育の環境から西洋への関心を十分にもち、留学の志をすでに持っていた。

・「元来自分は十三四の頃から既に遊学の志を抱いていたのであるが、ついにその機会を得ずして今日まで延び延びになって来ていた。それが一朝事熟して遂にその素志を達したことであるから、その落ち着く先が江戸であろうと、沼津であろうと・・・・非常に満足であった」　「もっとも郷里にいた自分から大雲叔父上より蘭書について文法の入門二三枚も習ったことがある」（齋藤修一郎著『懐旧談』による）

後年の英文自伝の西洋観に関する記述には違和感あり。（資料５：「英文自伝部分」参照）